



2020年度 第1回 太平洋いわし類・マアジ・さば類長期漁海況予報

— 別表の水産関係機関が検討し国立研究開発法人水産研究・教育機構
水産資源研究所がとりまとめた結果 —

今後の見通し(2020年8月~12月)のポイント

海況

黒潮はA型^(※1)基調で推移するものの、一時的にB型^(※1)になることがある。
沿岸水温は、豊後水道以西は「**平年並**」^(※2)~「**やや高め**」^(※2)、足摺岬~潮岬沖は「**低め**」^(※2)~「**平年並**」、
熊野灘~遠州灘~相模湾は「**平年並**」~「**高め**」^(※2)で暖水波及時に「**極めて高め**」^(※2)、伊豆諸島海域は
「**高め**」~「**極めて高め**」、房総~常磐南部海域は「**平年並**」~「**やや高め**」で推移する。

※1 黒潮を遠州灘沖から伊豆諸島周辺海域の流路で分類する

A型：流路南端が北緯32度以南

B型：八丈島の北を通過、流路南端が北緯32度以北で33度以南

※2 平年並=平年値±0.5℃程度、低め=平年値-1.5℃程度、

やや高め=平年値+1.0℃程度、高め=平年値+1.5℃程度、

極めて高め=平年値+2.5℃以上。

ただし、鹿島灘~常磐南部海域の基準は次頁末尾を参照のこと。

漁況(来遊量予測)

マイワシ

前年並~上回る海域が多い。

カタクチイワシ

低水準。

ウルメイワシ

室戸岬以西では前年を下回り、

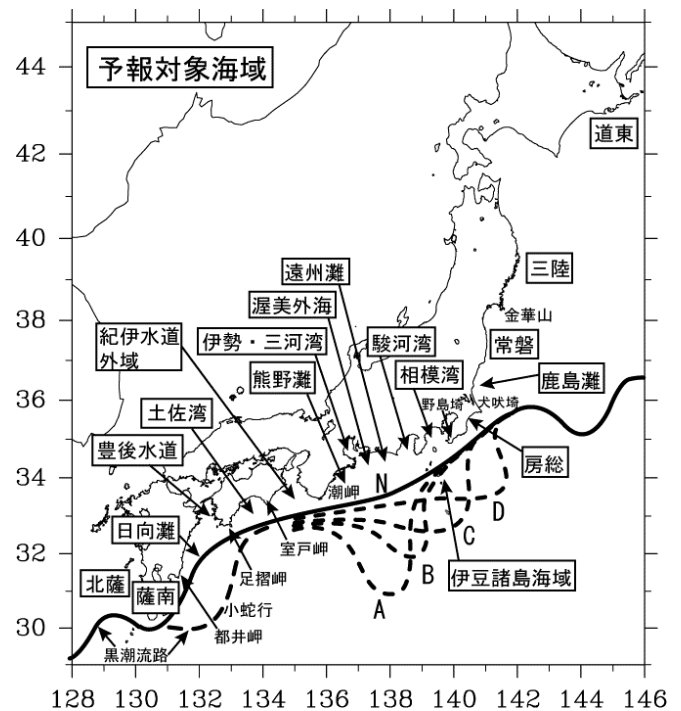
以東では前年並~上回る。

マアジ

前年を下回る海域が多い。

マサバ・ゴマサバ

マサバは前年並。ゴマサバは低水準。



問い合わせ先

国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所

担当 管理部門：渡邊、木村

漁況：浮魚資源部 西田、由上、古市、渡邊、木下、入路

海況：海洋環境部 市川、日下

電話：045-788-7615、ファックス：045-788-5001

当資料のホームページ掲載先URL

<http://www.fra.affrc.go.jp/pressrelease>

中央ブロック海況予報

今後の見通し（2020年8月～12月）

(1) 黒潮（注：黒潮流型は図1を参照のこと）

◎潮岬以西

- ・都井岬～足摺岬沖では、9月までは離岸傾向で推移し、10月以降接岸傾向で推移する。
- ・室戸岬～潮岬沖では、離岸傾向で推移する。

◎潮岬以東

- ・大蛇行が継続し、その流路はA型基調で推移するものの、一時的にB型になることがある。
- ・房総沖では、接岸傾向で推移するものの、一時的に離岸することがある。

(2) 薩南～房総海域

- ・都井岬～足摺岬沖では、10月以降は黒潮の離接岸変動による影響は少ない。
- ・室戸岬～潮岬沖では、黒潮北縁から一時的に暖水が波及することがある。
- ・熊野灘～遠州灘～伊豆諸島北部海域には、黒潮の蛇行北上部から暖水が波及することが多い。
- ・伊豆諸島南部海域は、暖水域に覆われる。
- ・房総沖では、黒潮から暖水が波及しやすいものの、一時的に沿岸水が分布することがある。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・黒潮の一時的な離接岸変動に伴い暖水が波及することがある。

(4) 沿岸水温

- ・豊後水道以西は、「平年並」～「やや高め」で推移する。
- ・足摺岬～潮岬沖は、「低め」～「平年並」で推移する。
- ・熊野灘～遠州灘～相模湾は、「平年並」～「高め」で推移し、暖水波及時には「極めて高め」となることがある。
- ・伊豆諸島海域は、「高め」～「極めて高め」で推移する。
- ・房総～常磐南部海域は、「平年並」～「やや高め」で推移する。

※ 平年並＝平年値±0.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.0℃程度、
（高め、低め）＝平年値±1.5℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±2.5℃以上
（鹿島灘～常磐南部海域では、平年並＝平年値±1.5℃程度、（やや高め、やや低め）＝平年値±1.5～4℃程度、
（高め、低め）＝平年値±4～6℃程度、（極めて高め、極めて低め）＝平年値±6℃以上）

経過（2020年3月～7月）（注：経過は図2を参照のこと）

(1) 黒潮

- ・ A型流路の大蛇行が持続したが、6月末に大蛇行の南端が切離して冷水渦が形成された。
- ・ 遠州灘をS字状に北上し、御前埼沖まで到達した後、石廊埼沖～御蔵島付近を通過する流路をとることが多く、特に4月上旬、5月下旬～6月上旬には、蛇行北上部が大王埼沖まで到達する流路となった。
- ・ 房総沖では、4月下旬～5月中旬に大きく離岸する時期があったものの、やや接岸～平年並の位置で推移した。

(2) 薩南～房総海域

◎薩南海域

- ・ 黒潮北縁の月平均位置は、3月は接岸、4月～5月は屋久島南付近の平均的な位置、6月～7月は接岸で推移した。

◎潮岬以西

- ・ 都井岬沖では、3月～4月、6月は接岸傾向、5月、7月は離岸傾向で推移した。
- ・ 足摺岬沖では、大小擾乱がたびたび通過し、5月下旬までは「接岸」～「かなり離岸」で不安定に推移し、5月下旬以降「かなり離岸」～「著しく離岸」で推移した。
- ・ 室戸岬沖では、大小擾乱がたびたび通過し、5月下旬まで「かなり離岸」、6月上旬以降「著しく離岸」で推移した。
- ・ 潮岬沖では、黒潮大蛇行に伴い「著しく離岸」で推移した。
- ・ 紀伊水道外域では、4月下旬、5月下旬～6月中旬に、小蛇行の通過に伴い黒潮北縁から一時的に暖水が波及した。

◎潮岬以東

- ・ 熊野灘～遠州灘には、大王埼～御前埼沖の黒潮屈曲部から暖水が波及することが多く、熊野灘に向けて黒潮内側反流による暖水流入が繰り返しみられた。
- ・ 5月下旬には、黒潮屈曲部から遠州灘～駿河湾にかけて暖水波及がみられた。
- ・ 伊豆諸島海域は、黒潮がその西側および北側を流れたため、暖水域に覆われた。
- ・ 石廊埼沖の黒潮東流部から、駿河湾へ向けて一時的に、大島東・西水道へ向けては断続的に暖水が波及し、特に4月中旬には、相模湾内に向けても顕著な暖水波及がみられた。
- ・ 房総沖では、4月下旬～5月中旬、および6月中旬～7月中旬を除いて、黒潮接岸による暖水波及の影響がみられた。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 4月に常磐南部海域の一部で冷水の影響がみられたものの、期間を通じて黒潮からの暖水の影響がみられることが多かった。

現況（2020年7月27日現在）

(1) 黒潮

- ・ A型流路であり、大蛇行が継続している。
- ・ 室戸岬沖から大きく離岸した後、熊野灘沖で 30° N 付近まで南下し、石廊崎沖まで S 字状に北上した後、御蔵島付近から北東へ流れている。

(2) 薩南～房総海域

◎潮岬以西

- ・ 黒潮は、都井岬沖で「かなり離岸」し、足摺岬～潮岬沖で「著しく離岸」している。

◎潮岬以東

- ・ 伊豆諸島海域は、暖水域に覆われている。
- ・ 房総沖では、黒潮は「やや接岸」して流れ、岸沿いに冷水域がみられる。

(3) 鹿島灘～常磐南部海域

- ・ 冷水域がみられる。

※ 黒潮の離接岸に関する語句表記は、川合英夫(1972)：海洋物理Ⅱ、東海大学出版会に準じた。

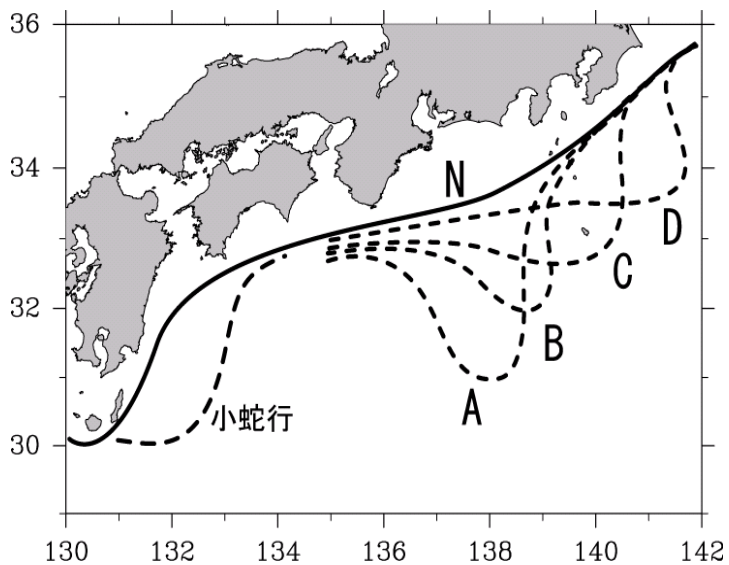


図1 黒潮流型の分類

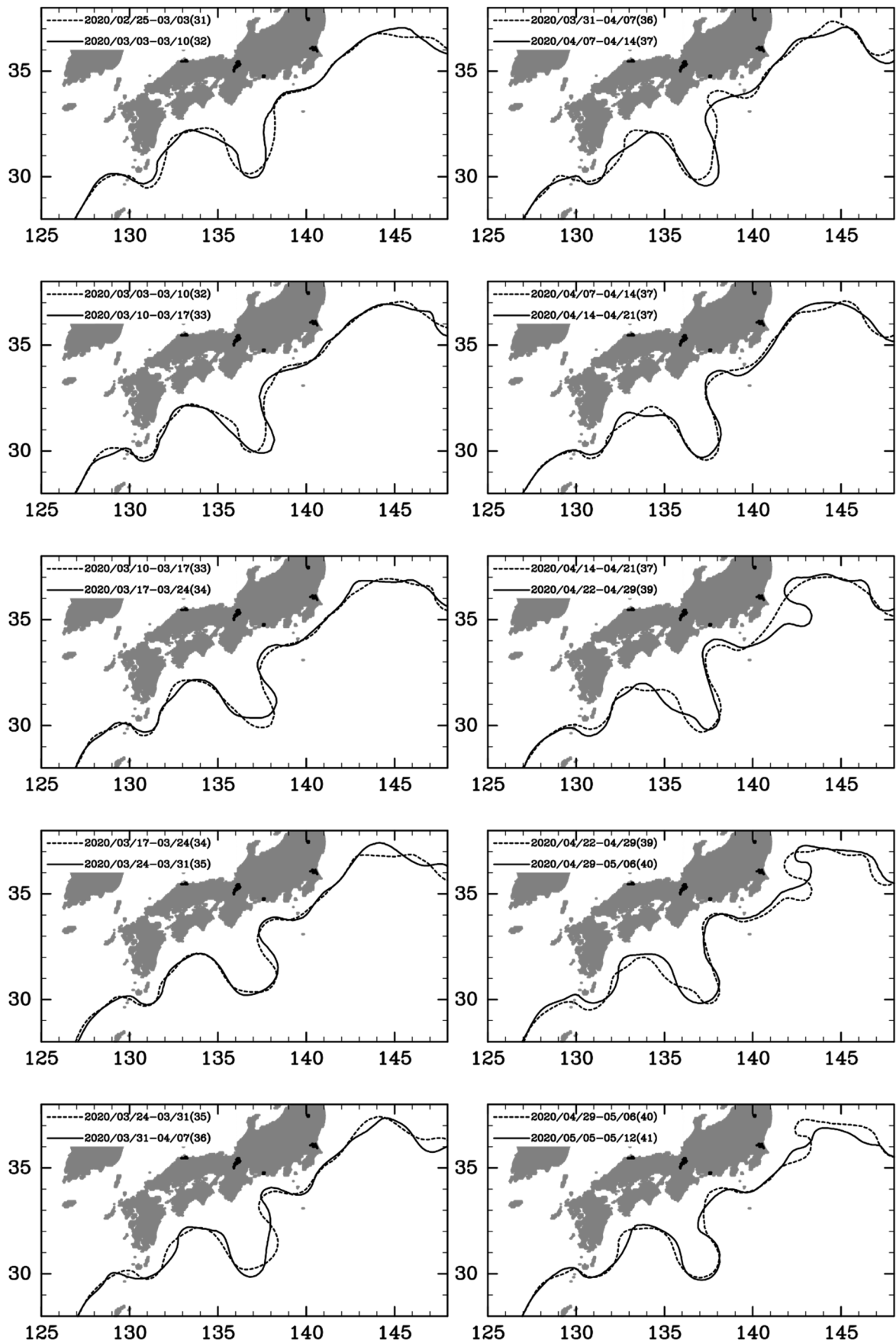


図2 黒潮流軸のパターン

(2020年3月~7月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

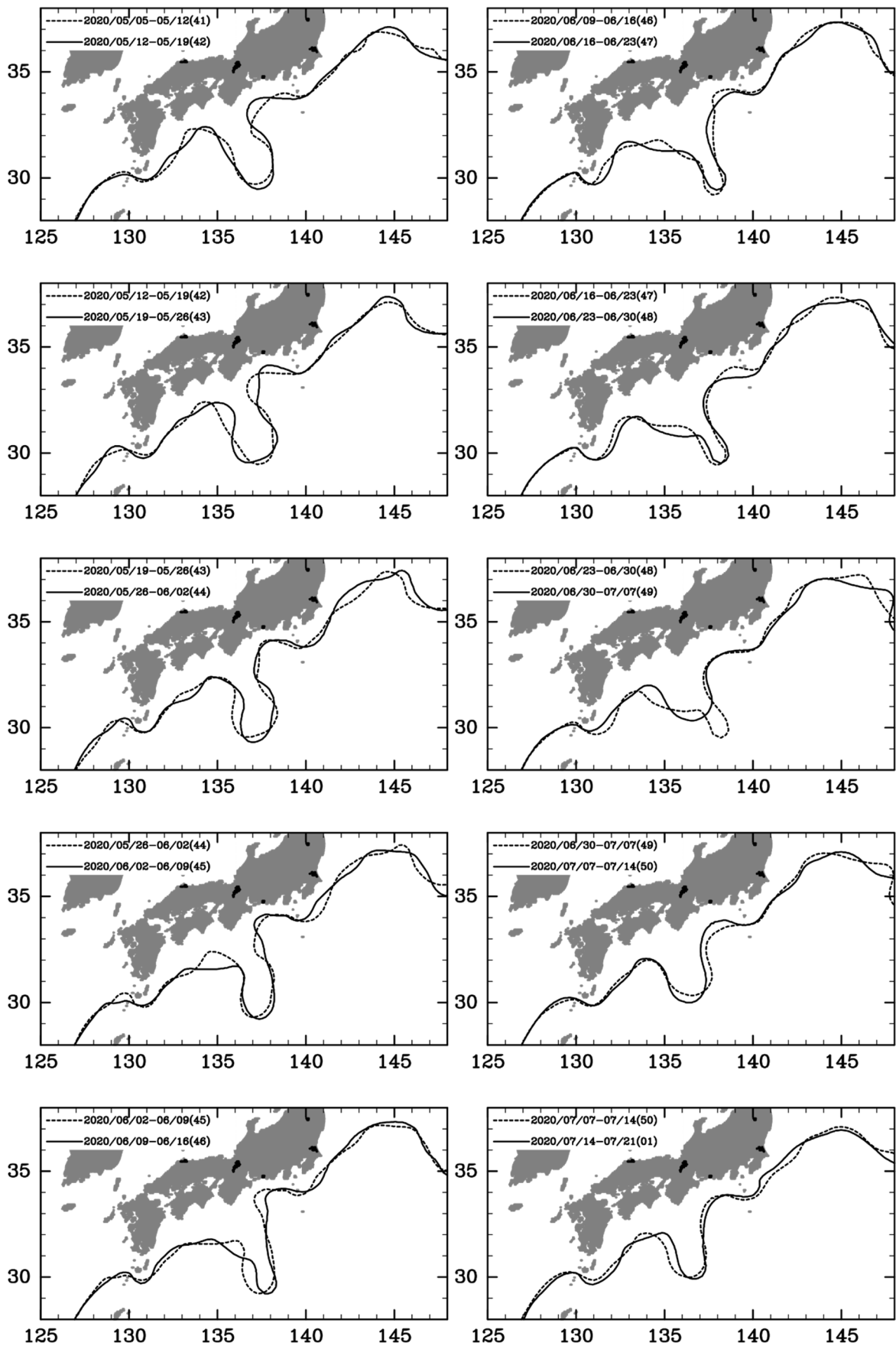


図2 (つづき) 黒潮流軸のパターン

(2020年3月~7月、海上保安庁海洋情報部海洋速報より作成)

マイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2020年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2020年級群）、1歳魚（2019年級群）、2歳魚（2018年級群）、3歳魚（2017年級群）、4歳魚（2016年級群）。年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩～豊後水道南部は前年を上回る。宿毛湾～紀伊水道外域では前年並。熊野灘では前年を上回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：12 cm～16 cm前後の0歳魚主体に漁獲され、15 cm以上の1歳以上が混じる。

2. 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：伊勢・三河湾、渥美外海では前年並。駿河湾、相模湾西部では前年を上回る。相模湾東部では前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：10 cm～15 cm前後の0歳魚主体に漁獲され、15 cm以上の1歳以上が混じる。

3. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総海域では前年を上回る。三陸海域、道東海域では前年並。

(2) 漁期・漁場：まき網は、8月～9月には房総海域、三陸海域、道東海域、10月には道東海域、11月～12月には三陸～房総海域で漁場が形成される。定置網は、各地で期を通じて漁獲されるが、期の後半以降に本格化する。

(3) 魚体：10 cm～15 cm前後の0歳魚、14 cm～18 cmの1歳魚、15 cm～19 cmの2歳魚、18 cm～21 cmの3歳魚、19 cm以上の4歳魚が漁獲される。

漁況の経過（2020年4月～2020年6月）および見通し（2020年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

マイワシ太平洋系群の資源量は、1980年代は1,000万トン以上の高い水準で推移したが、1990年代に入って急減し、2002年以降2009年まで10万トン前後の低い水準で推移した。その後、2010年～2014年に比較的良好的な加入が続いたこと、および漁獲圧が低下したことにより資源量は増加し、2014年には100万トンを上回った。その後も良好的な加入が続いたことにより資源量はさらに増加して、2018年は348万トンと推定された。

2016年級群（4歳魚）は、2019年資源評価において、加入量が253億尾と推定されており、2015年級群には及ばないものの近年において高い値となっている。2019年における3歳魚としての漁獲状況は、好調

であった前年並であった。2016年級群の残存資源量は、2015年級群の同時期を下回るものの、高い水準にある。

2017年級群（3歳魚）は、加入量が280億尾と推定されており、2016年級群と同程度の高い値となっている。2019年における2歳魚としての漁獲状況は、前年を上回った。2017年級群の推定残存資源量は、2016年級群の同時期と同程度の高い水準にある。

2018年級群（2歳魚）は、加入量が795億尾と推定されており、近年において最も高い値となっている。2019年における1歳魚としての漁獲状況も前年を大きく上回っており、高い豊度を示している。2018年級群の推定残存資源量は、2017年級群の同時期を上回っている。

2019年級群（1歳魚）は、0歳魚としての漁獲が好調であった前年を下回る水準で推移している。沖合域の調査においても、近年において高い水準であるが前年を下回る漁獲となっている。これらの情報から、2019年級群の加入量水準は、近年において高いものの2018年級群を下回ると考えられる。ただし、2019年級群の未成魚越冬群資源量指数（千葉県水産総合研究センター）は2001年以降で最も高い値となっていることから、2019年級群の加入量は過小評価となっている可能性もあり、加入量の見積りへの不確実性は大きい。

2020年級群（0歳魚）に対応する2020年の産卵量は、723兆粒（2020年5月までの暫定値）と、2019年（1,892兆粒）を下回った。マシラスとしての漁獲も、漁獲の中心である渥美外海～駿河湾において、前年を下回っている。一方で、未成魚としての漁獲は、北薩～豊後水道南部、駿河湾、相模湾西部、房総海域など複数の海域において前年を上回っている。また、沖合域の調査において、5月～6月の移行域幼稚魚調査（水産資源研究所）に基づく資源量指数は前年と同程度であり、6月～7月の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所）では前年を上回る漁獲が見られている。これらの情報から、現時点では不確実であるが、2020年級群の加入量は、前年並～上回る水準と考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 北薩～熊野灘（まき網、定置網）

・来遊量：近年の漁獲状況から、今期の主な漁獲対象は0歳魚（2020年級群）であり、1歳（2019年級）以上が混じる。

北薩、薩南海域では、5月以降に0歳魚のまとまった漁獲があり、非常に低調であった前年を上回って推移している。今期も引き続き漁獲されることが考えられることから、来遊量は前年を上回る。

日向灘では、定置網における0歳魚の漁獲量が前年を上回っていること、および6月以降に本海域の漁況が好調になっていることから、今期の来遊量は非常に低調であった前年を上回る。

豊後水道南部西側では、0歳魚主体の前期の漁獲量が前年を上回っていることから、今期も引き続き漁獲され、来遊量は前年を上回る。

豊後水道南部東側では、前期の0歳魚の漁獲状況が前年を大きく上回っていることから、今期も引き続き漁獲され、来遊量は前年を上回る。

宿毛湾、土佐湾では、シラス漁の漁況から0歳魚の発生は前年並と見込まれる。中型まき網や定置網の漁

況も前年並となっており、来遊量は前年並となる。

紀伊水道外域西部では、本海域では成魚を漁獲する漁業が少ないため、漁況から来遊量を予測することは難しいが、近年の傾向から来遊量は前年並となる。

紀伊水道外域東部では、近年、8月～12月の1そうまき網での漁獲量が少ない傾向にあり、前期の棒受網の漁獲量も少なかったことから、今期の来遊量は低調であった前年並となる。

熊野灘では、定置網で0歳魚を主体に前年を大きく上回る漁獲が見られたことから、本海域への0歳魚の加入は前年を上回ると期待される。黒潮流路も房総以北海域からの魚群の来遊を妨げるような状況にないと考えられ、今期の来遊量は前年を上回る。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、主体となる0歳魚は12 cm～16 cm前後。1歳以上は15 cm以上。

(2) 伊勢・三河湾～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：近年の漁獲状況から、今期の主な漁獲対象は0歳魚（2020年級群）であり、1歳（2019年級）以上が混じる。

伊勢・三河湾、渥美外海では、前期のマシラス漁獲量は前年を下回っているが、現在までぱっち網の操業がなく、0歳魚が漁獲されずに成長していることを考慮し、今期の来遊量は前年並となる。

駿河湾、相模湾西部では、0歳魚主体に5月、6月の漁獲が前年を上回っており、今期も引き続き漁獲されることが考えられることから、今期の来遊量は前年を上回る。

相模湾東部では、今後成長して0歳魚として漁獲対象になると考えられるマシラスの漁獲量が前年を大きく下回っていることから、今期の来遊量は前年を下回る。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：近年の出現状況から、主体となる0歳魚は10 cm～15 cm前後。1歳以上は15 cm以上。

(3) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

・来遊量：各年級群の資源状態と近年の漁獲状況から、今期の漁獲対象は、房総海域では0歳魚（2020年級群）主体に、期後半から1歳（2019年級群）以上も漁獲される。三陸海域、道東海域では1歳（2019年級群）以上が主体に漁獲され、漁期終盤に0歳魚が多くなる。

房総海域では、期前半は沿岸発生0歳魚主体に漁獲され、直近の漁獲状況から、来遊量は低調であった前年を上回ると考えられる。期後半から漁獲される1歳以上の来遊量は、資源状態を反映して前年並と考えられる。本海域の漁獲の主体は沿岸発生0歳魚であることを踏まえると、全体としての来遊量は前年を上回る。

三陸海域、道東海域では、資源状態を反映して、1歳以上の来遊量は前年並と考えられる。0歳魚の来遊量は、現在得られている沖合域調査の結果から、前年並～上回る水準と考えられる。本海域の漁獲の主体は1歳以上であることを踏まえると、全体としての来遊量は前年並となる。

- ・漁期・漁場：近年および直近の魚群の来遊状況から、まき網は、8月～9月には房総海域、三陸海域、道

東海域で、10 月には道東海域で、11 月～12 月には三陸～房総海域で漁場が形成される。定置網は、各地で期を通じて漁獲されるが、期の後半以降に本格化する。

・魚体：近年の出現状況から、0 歳魚は 10 cm～15 cm 前後、1 歳魚は 14 cm～18 cm、2 歳魚は 15 cm～19 cm、3 歳魚は 18 cm～21 cm、4 歳魚は 19 cm 以上。

カタクチイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2020年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、船曳網

対象魚群：0歳魚（2020年級群）、1歳魚（2019年級群）、2歳魚（2018年級群）。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

1. 西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）

(1) 来遊量：西薩～紀伊水道外域では予測が困難。伊勢・三河湾、渥美外海、遠州灘～駿河湾では前年並。相模湾では前年を上回る。鹿島灘～常磐南部海域では前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

2. 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：北薩、薩南海域では前年を下回る。日向灘では前年を上回る。豊後水道西側では前年並～上回る。豊後水道東側では前年を下回る。宿毛湾・土佐湾では前年を下回る。紀伊水道外域では予測が困難。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：4 cm～12 cmの0、1歳魚主体。

3. 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

(1) 来遊量：熊野灘では予測が困難。伊勢・三河湾、渥美外海、駿河湾、相模湾西部では前年並。相模湾東部では前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：9 cm以下の0歳魚主体に、10 cm～13 cmの1歳魚が漁獲される。

4. 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

(1) 来遊量：房総・常磐海域では前年並。三陸南部海域では前年を上回る。三陸北部海域、道東海域ではまとまった漁獲がない。

(2) 漁期・漁場：道東海域、常磐～房総海域の1そうまき網の主な漁獲対象にはならない。三陸海域の定置網、房総沿岸海域の2そうまき網は期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：0歳魚は11 cm以下、1歳魚は12月で10 cm～13 cm。

漁況の経過（2020年4月～2020年6月）および見通し（2020年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

カタクチイワシ太平洋系群の資源量は、1998年から2010年まで114万トン～291万トンで推移した。2010年に降減少傾向を示し、2018年の資源量は8万トンと推定された。資源水準は低位、動向は5年間で減少傾向である。本系群は漁場が形成される沿岸域だけでなく黒潮親潮移行域まで広く分布する。

2018年級群（2歳魚）は、2019年度資源評価において、加入量が122億尾と推定されており、2017年級群を下回る低い値となっている。0歳魚としての漁獲量は、前年を下回る低い水準となったものの、1歳魚としての漁獲量は前年を上回る水準であった。沖合域の調査船調査では、2019年の北西太平洋

北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所）の推定1歳以上のCPUEと出現率は極めて低い水準であった。北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所）における推定1歳以上のCPUEは昨年を上回ったものの、前年同様に道東、千島列島沖合に分布は認められず、出現率も低かった。以上の状況から、2018年級群は最近10年の中で見れば低水準と考えられる。

2019年級群（1歳魚）は、2019年7月～11月に東海海域を中心に、カタクチシラスや0歳魚として多獲され、それらの漁獲量は前年を上回った。沖合域の調査では、2019年の北西太平洋北上期浮魚類資源調査において、推定0歳魚のCPUEが前年を上回ったものの、非常に低い値であった。北西太平洋秋季浮魚類資源調査における推定0歳魚のCPUEは前年を大きく上回ったものの、前年同様、道東、千島列島沖合に分布は認められず、出現率も低かった。以上の状況から、2019年級群は最近10年の中で見れば低水準であるが、前年を上回る水準と考えられる。

2020年級群（0歳魚）の加入量を現時点で予測することは難しい。2020年の産卵量（2020年6月までの暫定値）は、991兆粒と2019年（826兆粒）並、1月～6月のカタクチシラスとしての漁獲量は前年並であった。また、当機構が実施している北西太平洋北上期浮魚資源量調査の2020年暫定値によれば、0歳魚CPUEは0.3尾/網/時間で前年（0.8尾/網/時間）並であった。以上のことから、不確実性は高いものの、2020年級群は前年並の低水準と考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

(1) 西薩～常磐南部海域のシラス（船曳網）

・来遊量：西薩～紀伊水道外域では、今後大型成魚の来遊は少ないと予測されるが、シラスの漁場形成については予測が困難である。

伊勢・三河湾、渥美外海では、今期はカタクチシラスが漁獲の主体となる。3月～5月のカタクチシラス漁獲量は少なかったものの、6月以降は好調に推移している。内湾で漁獲されたカタクチイワシの魚体サイズは前年と比べると小さく、成熟度も低いため、夏から秋期のシラスの加入は前年ほど多くはない可能性がある。一方で、ぱっち網の操業開始時期が遅かったことから、親魚の残存資源量が多くなることが期待される。よって、来遊量は前年並となる。

遠州灘～駿河湾では、地先観測の5月～6月のカタクチイワシ卵平均採集数が、7月～8月の水揚量が低調であった2008年、2013年、2015年～2019年並であったため、7月～8月の水揚量は前年と同じく低調になると考えられる。9月～10月の水揚量は、黒潮大蛇行期には非大蛇行期に比べて少なくなる傾向があり、現在の黒潮大蛇行は継続すると予測されていることから、9月～10月の水揚量は前年並に低調となる。11月～12月の水揚量は、シラスの水揚げ盛期を過ぎることから、水揚量は低調になると考えられる。以上から総じて、来遊量は低調な前年並となる。

相模湾では、黒潮の流路変動がシラス来遊量に及ぼす影響が大きいですが、今期は、多くの卵が見いだされる東京湾からのシラス来遊が期待される。さらに、相模湾内で夏以降に産卵が期待されるカタクチイワシ未成魚が、近年では多いとの情報があることから、来遊量は前年を上回る。

鹿島灘～常磐南部海域では、近年、シラス漁獲量は8月～9月に多く、同時期の漁獲量は7月の沿岸域水温が低いと増加する傾向が見られる。2020年7月の鹿島灘沿岸水温は水温とシラス漁獲量との関係を調べ

た2013～2019年の平均水温と比較して低い値であり、ある程度の漁獲量が見込まれるが、好漁となった前年を下回る。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。

(2) 北薩～紀伊水道外域（まき網、定置網）

・来遊量：北薩、薩南海域では、今期の漁獲の主体となる1歳魚（2019年級群）の漁況が、4月～6月期に前年を下回って推移していることから、来遊量は前年を下回る。

日向灘では、今期の漁獲対象は2010年以降、沿岸発生群主体の0歳魚（2020年級群）となっている。今期の0歳魚の漁獲量は、1月～6月の宮崎県まき網漁獲量および大分県まき網漁獲量の相乗平均値と正の関係にあり、この指標値が前年を上回っていることから、来遊量は非常に低調であった前年を上回る。

豊後水道西側では、今期は0歳魚が漁獲の主体となり1歳魚が混じる。1月～6月の0歳魚主体の水揚量は前年を上回っているものの、現状の資源状態は低位であることから、来遊量は前年並～上回る。

豊後水道東側では、被鱗体長10 cm以下の周辺海域で発生したと推定される0歳魚が漁獲の主体となる。6月までのカタクチシラスの水揚量は前年並、0歳魚主体のまき網漁業による水揚量は前年を下回っていることから、来遊量は前年を下回る。

宿毛湾、土佐湾では、期を通じて0歳魚、1歳以上が漁獲の対象となる。上半期の宿毛湾小型まき網における「かえり」銘柄の水揚量と下半期の中型まき網水揚量には有意な正の関係がみられることから、上半期の小型まき網における「かえり」銘柄の水揚量が前年を下回ったため、来遊量は前年を下回る。

紀伊水道外域では、未成魚・成魚は主たる漁獲対象ではない。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：4 cm～12 cmの0、1歳魚主体。

(3) 熊野灘～相模湾（まき網、定置網、船曳網）

・来遊量：熊野灘では、マイワシなどにわずかに混じって漁獲されることが多いことから、まとまった来遊はない。

伊勢・三河湾、渥美外海では、6月までぱち網の操業が行われておらず、漁獲対象資源が残存していると考えられる。また、6月のカタクチシラスの漁獲量は多かったことから、秋以降に未成魚・成魚として漁獲対象になると期待される。以上のことから、来遊量は前年並となる。

駿河湾、相模湾西部では、カタクチイワシ資源量が引き続き低水準であることから、前年並となる。

相模湾東部では、近年の漁獲傾向から、今期は未成魚である0歳魚主体の漁獲になると考えられる。近年は8月中旬以降、ほとんど漁獲されない状況が継続しているため、来遊量は前年を下回る。

- ・漁期：各海域とも期を通じて漁獲される。
- ・魚体：9 cm以下の0歳魚主体に、10 cm～13 cmの1歳魚が漁獲される。

(4) 房総～三陸海域、道東海域（まき網、定置網）

- ・来遊量：房総・常磐海域では、例年、11月以降は2歳魚主体の大型魚と1歳魚主体の小型魚が漁獲対象

となる。前年11月～12月0歳魚と1月～6月1歳魚の漁獲量の合計値と、11月～12月1歳魚と翌年1月～6月2歳魚の漁獲量の合計値が正の関係にあることから、前年漁期の小型魚が翌年に大型魚となって再来遊すると考えられている。2019年11月～2020年6月の房総・常磐海域における小型魚（年明け1歳魚、2019年級群）の漁獲量は、2,463トンで1999年以降最低であった前年（2,987トン）を下回ったことから、今後の漁獲対象となる1歳以上は前年を下回り、依然として低水準。0歳魚（2020年級群）主体の小型魚の来遊量は予測が難しい。総じて、不確実性が大きいものの、来遊量は低水準な前年並となる。

三陸南部海域では、これまでの水揚の経過から判断すると、前年を上回るものの低水準となる。

三陸北部海域、道東海域では、漁業情報や調査船調査の結果から判断して、まとまった漁獲がない。

・漁期・漁場：資源量が多い年には、道東海域のまき網では8月～10月に、常磐～房総海域の1そうまき網では12月以降に漁場が形成されていたが、資源量の少ない近年は主な漁獲対象にはならない。三陸海域の定置網、房総沿岸海域の2そうまき網は期を通じて漁獲される。

・魚体：6cm～11cmの0歳魚が期を通じて、10cm～13cmの1歳魚が12月以降に漁獲される。

ウルメイワシ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2020年8月～12月）

対象海域：北薩～熊野灘

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、多鈎釣

対象魚群：0歳魚（2020年級群）、1歳（2019年級群）以上。

年初に加齢。魚体は被鱗体長。

(1) 来遊量：北薩・薩南海域、日向灘、豊後水道、宿毛湾・土佐湾では前年を下回る。

紀伊水道外域では前年並。

熊野灘では前年並～上回る。

全体としては前年を下回る。

(2) 漁期：期を通じて漁獲される。

(3) 魚体：0歳魚（8 cm～20 cm）が主体となる。海域により1歳以上（20 cm以上）も対象となる。

漁況経過（2020年1月～6月）および見通し（2020年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

資源状態について、産卵調査に基づく産卵量と、半年単位のコホート解析により計算した資源量から、水準と動向を判断した。漁獲の大部分を占める鹿児島県～三重県の漁獲量は、2015年に過去最高となり、2016年以降は減少が続いたが、2019年は前年よりやや増加した。1978年以降の卵稚仔調査に基づいて求めた日向灘～潮岬（海区III）の年間産卵量は、2016年には134兆粒で高位水準であったが、2017年より減少して2018年は64兆粒（中位）となり、2019年の産卵量75兆粒も同じ水準にある。最近5年間（2015年～2019年）の資源量は66千トン～125千トンの範囲にあり、その推移から、資源動向は減少と判断した。コホート解析では、半期（1月～6月、7月～12月）単位で寿命24月齢までの4期とし、0月齢～5月齢（0歳）を1期、6月齢～11月齢（0歳）を2期、12月齢～17月齢（1歳）を3期、18月齢～23月齢（1歳）を4期とした。産卵量は長期的には増加傾向にあり、2003年以降は中位～高位水準を保っている。さらに、2007年以降の資源量、親魚量、加入量は、増減を繰り返しながらも全体としては安定して推移している。これは、長期的には再生産は高い水準で順調に行われていることを示唆しているものの、直近の資源は減少傾向にある。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

2020年後期（8月～12月）は0歳魚（2020年級群）主体の漁況になることが推測されるため、2020年前期（1月～6月）の漁況等から、0歳魚の加入状況を予測した。

予測対象海域に相当する鹿児島県～三重県の主要港における前期（1月～6月）水揚量と後期（8月～12月）水揚量には、強い正の関係がある。2020年前期（1月～6月）の水揚量は5千トンであった。2000年～2019年の前期（1月～6月）水揚量と後期（8月～12月）水揚量の間関係を用いて、2020年後期（8月～12月）の水揚量は9千トンと予測された。2019年の後期（8月～12月）水揚量は、16千トンであった。従って、2019年の後期（8月～12月）水揚量は、海域全体としては前年を下回ると予測される。

北薩および薩南海域では、0歳魚（10 cm～17 cm）が主体となる。漁獲の主体となる0歳魚の2020年5月以降の漁況は、前年を下回っていることから、前年を下回ると予測される。

日向灘では、0歳魚～1歳魚（13 cm～20 cm台）が主体となる。0歳魚の漁況と加入量指標値の間に正の関係が認められ、2020年の加入量指標値は前年を下回っていることから、来遊水準は前年を下回ると予測される。

豊後水道西側では、8月～10月は0歳魚（10 cm～15 cm）が主体となる。4月～6月のまき網水揚量が前

年を下回ったことから、今期の0歳魚の来遊に期待が持てない。そのため、水揚量の好調だった前年を下回る来遊になると予測される。

豊後水道東側では、0歳魚が主体となる。新規加入が認められる4月～6月と0歳魚主体の漁獲となる8月～12月の漁獲量には正の関係が認められ、4月～6月の漁獲量が前年を下回ったことから、来遊水準は前年を下回ると予測される。

宿毛湾および土佐湾では、0歳魚が主体となり、期の後半には1歳以上も漁獲される。宿毛湾の中型まき網における前期水揚量と8月～12月の水揚量の間には、正の関係が認められる。この関係によれば、2020年前期水揚量が前年を下回ったことから、来遊水準は前年を下回ると予測される。

紀伊水道外域西部では、例年この時期に漁獲がほとんどなく、来遊水準は前年通り低いと予測される。

紀伊水道外域東部では、2020年4月～6月の1そうまき網は漁獲がなかった。2014年以降は、1月～6月の漁獲量に比べ、8月～12月の漁獲量が少なく、2020年も同様の傾向であると考えられる。また、2020年4月～6月の棒受網の漁獲量は前年を下回った。以上より、8月～12月の漁獲は前年並みに低いと予測される。

熊野灘では、0歳魚（8 cm～20 cm）および1歳以上（20 cm以上）が主体となる。例年、8月～12月に漁獲主体となるのは0歳魚であり、2010年～2017年、2019年は定置網の5月、6月とまき網の8月～11月の漁獲量に正の関係がみられたが、2018年はその関係が見られず、特異的な不漁となった。この原因としては、2018年は5月、6月の定置網が1歳魚主体で0歳魚が少なかったことに加え、マイワシと同様に秋季の黒潮大蛇行に伴う房総周辺海域への暖水接岸が影響したと考えられる。2020年は7月上旬現在、黒潮大蛇行部の北上流路は伊豆半島の西にあり、房総周辺海域において暖水は陸地付近まで接岸していない。この海況が続けば魚群の南下を妨げないことから、房総周辺以北の海域における加入が著しく悪くなく、海況も現況が基調となると仮定すれば、前年並～上回る来遊水準と予測される。

マアジ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2020年8月～12月）

対象海域：北薩～熊野灘、相模湾

対象漁業：まき網、定置網

対象魚群：0歳魚（2020年級群）、1歳魚（2019年級群）、
2歳魚（2018年級群）、3歳（2017年級群）以上。
年初に加齢、魚体は尾叉長。

1. 北薩～土佐湾（まき網、定置網）

(1) 来遊量：いずれの海域も前年を下回る。

(2) 魚体：北薩～薩南海域では0歳魚～2歳魚主体、日向灘、豊後水道南部では0歳魚が主体、宿毛湾・土佐湾では0歳魚、1歳魚が主体。0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～25 cm、2歳魚以上は23 cm以上。

2. 紀伊水道外域～熊野灘（まき網、定置網）

(1) 来遊量：紀伊水道外域西部は前年並、紀伊水道外域東部～熊野灘は前年を下回る。

(2) 魚体：紀伊水道外域西部では0歳魚主体、紀伊水道外域東部では1歳魚～4歳魚主体、熊野灘では1歳魚主体に0歳魚および2歳以上が混じる。0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～25 cm、2歳魚は23 cm～27 cm、3歳以上は25 cm以上。

3. 相模湾（定置網）

(1) 来遊量：伊豆東岸では低調であった前年を上回る。西湘地区では前年並。

(2) 魚体：主体となる0歳魚は19 cm以下、1歳魚は19 cm～22 cm。

漁況の経過（2020年1月～6月）および見通し（2020年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

資源量は1986年以降増加し、1990年代半ばは15万トン～16万トンと高い水準で推移したが、1997年以降減少した。2009年～2013年は横ばいで推移したが、その後再び減少している。加入量は1993年をピークに減少し、2009年以降3.2億尾～7.1億尾と低い水準で推移している。令和元年度（2019年度）資源評価において、2018年の資源量は4.3万トン、親魚量は2.3万トンと推定され、資源水準は低位、動向は減少と判断された。

2017年級群（3歳魚）の加入量は4.2億尾と推定され、残存資源量は少ない。

2018年級群（2歳魚）の加入量は3.6億尾と推定された。2019年後半～2020年前半の漁況は低調に推移しており、残存資源量は少ないと考えられる。

2019年級群（1歳魚）は、いずれの海域でも漁獲対象になる。0歳魚時（2019年1月～12月）の漁獲尾数は102百万尾と、前年同期（117百万尾）を下回り、1歳魚時（2020年1月～6月）の漁獲尾数（主要港集計、暫定値）も12百万尾と、前年同期（主要港集計、26百万尾）を下回った。加入量の指標となる0歳魚時の漁獲状況は、宮崎県南部定置網アジ仔CPUE、宇和島港まき網ゼンゴCPUE、宿毛湾まき網ゼンゴCPUE、および伊勢湾小型底びき網（まめ板）当歳魚漁獲量（いずれも2019年4月～2020年3月）は前年同期を下回った。串本棒受網当歳魚漁獲量（2019年5月～6月）、千葉県定置網当歳魚漁獲量（2019年10月～2020年3月）、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量（2019年4月～2020年3月）は前年を上回ったものの低い水準であった。漁獲尾数の減少に加え、加入量指標値が多くの海域で減少したことから、2019年級群（1歳魚）の加入量は前年を下回ると考えられる。

2020年級群（0歳魚）は、いずれの海域でも漁獲対象になる。2020年1月～6月の漁獲尾数（主要港集

計、暫定値)は12百万尾と、前年同期(主要港集計、13百万尾)を下回った。各県地先の0歳魚の漁獲状況を4月~6月で比較すると、宮崎県南部定置網アジ仔CPUEは前年並、宇和島港まき網ゼンゴCPUE、伊勢湾小型底びき網(まめ板)当歳魚漁獲量は前年を下回り、宿毛湾まき網ゼンゴCPUE、串本棒受網当歳魚漁獲量(5月~6月)、伊豆東岸定置網当歳魚漁獲量は前年を上回った。現時点での見積もりは不確実であるが、2020年級群(0歳魚)の加入量は2019年級群並かこれを下回る低い水準と考えられる。

2. 来遊量、漁期・漁場

本魚種は予測期間を通じて漁獲対象となる。来遊量については、海域ごとに前期の漁況に基づき予測した。年齢別体長は、これまでの体長組成の推移から概ね次のとおりである。0歳魚:19cm以下、1歳魚:19cm~25cm、2歳魚:23cm~27cm、3歳以上:25cm以上。3歳以上の年齢に対応した体長区分は現状では困難である。なお近年の報告によると、相模湾以東では尾叉長20cm台に3歳から10歳以上の高齢魚がみられることが明らかになってきている。したがって相模湾については報告された年齢体長キーから判断し、0歳魚:19cm以下、1歳魚:19cm~22cmとした。

(1) 北薩~土佐湾

北薩~薩南海域では、0歳魚~2歳魚(2020年級群~2018年級群)が漁獲の主体となる。0歳魚を含む2020年4月~6月の漁獲量は前年を下回ったことから、今期の来遊量は前年を下回ると考えられる。

日向灘では、0歳魚(2020年級群)が漁獲の主体となる。0歳魚の漁獲量は日向灘南部大型定置網アジ仔CPUE、宇和海南部まき網漁獲量、大分県まき網漁獲量を用いた指標値と正の関係が認められ、この関係から判断して今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部西側では、0歳魚(2020年級群)が漁獲の主体となる。2020年1月~6月における豊後水道南部主要3港の水揚量は、大型魚が水揚された4月~5月を除いて前年を下回った。大分県南部定置網や豊後水道東側においてもマアジ当歳魚の水揚げは低調に推移している。以上のことから来遊量は前年を下回ると予測される。

豊後水道南部東側では、0歳魚(2020年級群)が漁獲の主体となる。5月~6月と8月~12月の漁獲量には正の関係が認められ、この関係から判断して今期の来遊量は前年を下回ると予測される。

宿毛湾・土佐湾では中型まき網で0歳魚(2020年級群)の来遊が前年より非常に多いが、1歳魚~2歳魚(2018年級群~2019年級群)の来遊は少なく、また定置網においても0歳魚~1歳魚(2019年級群~2020年級群)の来遊が少ないため、来遊量は前年を下回ると考えられる。

(2) 紀伊水道外域~熊野灘

紀伊水道外域西部では、2020年1月~6月の漁獲量は前年同期を下回って低調であった。例年8月~12月にはほとんど漁獲がなく、漁況から来遊水準を判断することが難しいが、近年の動向から平年並と予測される。

紀伊水道外域東部では、1歳魚~4歳魚(2019年級群~2016年級群)が漁獲の主体となる。潮岬沖の黒潮の離岸状況次第で、来遊および漁場形成条件が好転する可能性はあるが、2020年1月~6月の漁獲状況から、来遊量は前年を下回ると予測される。

熊野灘では、前期のまき網の漁況から1歳魚、2歳魚の来遊量は前年を下回り、0歳魚も定置網の漁況から前年を下回ると考えられる。総じて前年を下回ると予測される。

(3) 相模湾

伊豆東岸では、0歳魚(2020年級群)が漁獲の主体となる。0歳魚の1月~6月の漁獲尾数と7月~12月の漁獲尾数には正の関係が認められ、この関係から来遊量は低調ではあるが前年を上回ると予測される。

西湘地区では、0歳魚(2020年級群)が漁獲の主体となり、1歳魚(2019年級群)も漁獲される。1月~6月の0歳魚漁獲量と7月~12月のマアジ総漁獲量には一定の関係性が認められており、この関係から判断して来遊量は前年並と予測される。

(4) 房総~三陸海域の漁獲情報

房総~鹿島灘海域における北部まき網の2020年1月~6月の漁獲量は1,551トン(TACシステム)と、極めて低調であった前年同期235トンを上回ったものの、2018年(1,588トン)並と低調であった。資源

量の少なさに加え、マイワシ1歳魚の豊漁も影響した。予測期間中、1そうまきはマイワシ、サバ、スルメイカを対象として三陸海域以北での操業が中心となり、マアジは漁獲の対象とならない。仙台湾～三陸海域では、宮城県の2020年1月～6月の漁獲量は42トン、岩手県の2020年1月～6月の定置網による漁獲量は6トンと低調であった前年を上回った。青森県では2020年1月～6月の漁獲量は平館定置網を中心に27トンと上回った。

マサバおよびゴマサバ太平洋系群等の漁況予報

今後の見通し（2020年8月～12月）

対象海域：北薩～三陸海域、道東海域

対象漁業：まき網、定置網、棒受網、たもすくい等

対象魚群：0歳魚（2020年級群）、1歳魚（2019年級群）、2歳魚（2018年級群）、
3歳魚（2017年級群）、4歳魚（2016年級群）、5歳魚（2015年級群）、
6歳（2014年級群）以上。
年初に加齢。魚体は尾叉長。

1. 北薩～日向灘～豊後水道南部～土佐湾（まき網、定置網等）

- (1) 来遊量：北薩～薩南、土佐湾ではゴマサバ主体に漁獲され、サバ類全体としては前年を下回る。日向灘、豊後水道南部西側ではマサバ主体に漁獲され、サバ類全体としては前年並。豊後水道南部東側ではマサバ主体に漁獲され、サバ類全体としては前年を下回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：ゴマサバは北薩～薩南では20 cm～35 cm（0歳魚～2歳魚）主体、日向灘～豊後水道南部では20 cm～32 cm（0歳魚、1歳魚）主体、土佐湾では30 cm～38 cm（3歳魚～5歳魚）主体。マサバは日向灘～豊後水道南部では30 cm以下（0歳魚、1歳魚）主体。

2. 紀伊水道外域（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバを主体とするサバ類全体としては前年並。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは28 cm～35 cm（2歳魚～5歳魚）主体、ゴマサバは27 cm～34 cm（1歳魚～4歳魚）主体。

3. 熊野灘（まき網、定置網）

- (1) 来遊量：マサバは前年を上回る。ゴマサバは極めて低調であった前年を上回るものの低水準。サバ類全体としては前年を上回る。
- (2) 漁期：期を通じて漁獲される。
- (3) 魚体：マサバは15 cm～25 cm（0歳魚）主体に28 cm以上（1歳以上）も漁獲される。ゴマサバは27 cm～35 cm（1歳魚～3歳魚）主体に20 cm～25 cm（0歳魚）、35 cm以上（4歳以上）も漁獲される。

4. 伊豆諸島周辺海域（棒受網、たもすくい）

- (1) 来遊量：マサバは低水準。ゴマサバ1歳魚、2歳魚は前年を上回る。3歳魚は前年並。ゴマサバ全体としては極めて低調であった前年を上回るものの低水準。サバ類全体としては低水準。
- (2) 漁期・漁場：期を通じて伊豆諸島北部海域が主漁場となり、三宅島周辺海域、銭洲海域にも漁場が形成される。
- (3) 魚体：ゴマサバは28 cm～33 cm（2歳魚）、31 cm～36 cm（3歳魚）主体に、26 cm～30 cm（1歳魚）、33 cm以上（4歳以上）も漁獲される。

5. 犬吠～三陸海域、道東海域（まき網、定置網等）

- (1) 来遊量：マサバ1歳魚は前年を下回る。2歳魚は前年を上回る。3歳魚は前年を下回る。4歳魚は前年を上回る。5歳魚は前年並。6歳魚は前年を下回る。7歳以上は前年を上回る。マサバ全体としては前年並。ゴマサバは混獲される程度。サバ類全体としては前年並。
- (2) 漁期・漁場：定置網は期を通じて漁獲される。まき網漁場は、8月～10月は道東海域～三陸北部、11月～12月は三陸北部～犬吠海域に主に形成される。
- (3) 魚体：マサバはまき網では26 cm～36 cm（3歳魚～7歳魚）主体に、定置網・底びき網では22 cm～27 cm（2歳魚）主体に、26 cm～36 cm（3歳魚～7歳魚）も漁獲される。

漁況の経過（2020年1月～6月）および見通し（2020年8月～12月）についての説明

1. 資源状態

1) マサバ

資源量は1990年代～2000年代前半に極めて低い水準にあったが、2004年以降の加入量水準の高い年級群の発生と漁獲圧の低下により資源量が増加し、加入量水準の極めて高い2018年級群により、2018年の資源量は1970年以降で最も高い値となった。2013年級群以降、成長および成熟の遅れがみられている。

2013年級群（7歳魚）は、2019年12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が186億尾と卓越して高い水準であり、これまでの漁獲物に占める割合は高齢となっても比較的高い。残存資源量は最近10年（以下、近年）の7歳魚としては極めて多い。

2014年級群（6歳魚）は、推定加入量が60億尾と近年の平均（88億尾）を下回る水準であるが、これまでの漁獲物に占める割合は比較的高い。

2015年級群（5歳魚）は、推定加入量が52億尾と近年の平均を下回る水準であるが、これまでの漁獲物に占める割合は比較的高い。

2016年級群（4歳魚）は、推定加入量が130億尾と近年を上回る水準であり、これまでの漁獲物に占める割合は比較的高い。

2017年級群（3歳魚）は、推定加入量が89億尾と近年の平均程度の水準であり、これまでの漁獲物に占める割合は比較的高い。

2018年級群（2歳魚）は、推定加入量が292億尾と卓越して高い水準であるが、これまでの漁獲物に占める割合は推定加入量の多さと比較すると高くはなく、加入量の見積もりの不確実性は依然として高い。

2019年級群（1歳魚）の加入量は、2019年の北西太平洋北上期浮魚類資源調査（水産資源研究所、6月～7月、2001年以降実施）、北西太平洋秋季浮魚類資源調査（水産資源研究所、9月～10月、2005年以降実施）および再生産関係から近年の平均程度の水準（77億尾）と推定されている。一方、これまでの漁獲物に占める割合は低く、加入量の見積もりの不確実性は高い。

2020年級群（0歳魚）は、北西太平洋北上期浮魚類資源調査における出現率が53%であり、過去の同調査（20年間）で4番目に高い値で、2019年（32%）よりやや高い程度であることから、現時点での加入量の見積もりは不確実であるが、近年の平均程度の水準と見込まれる。

2) ゴマサバ

資源量は1990年代後半から高い水準にあったが、2011年以降、減少傾向を示し、2018年の資源量は低い水準となっている。

2015年級群（5歳魚）は、2019年12月時点の資源評価（コホート解析）による推定加入量が2.0億尾と近年の平均（6.9億尾）を下回る水準であり、残存資源量は高齢となって少なくなっている。

2016年級群（4歳魚）は、推定加入量が3.0億尾と近年の平均を下回る水準である。

2017年級群（3歳魚）は、推定加入量が1.9億尾と近年の平均を下回る水準である。

2018年級群（2歳魚）は、推定加入量が2.9億尾と近年の平均を下回る水準である。

2019年級群（1歳魚）の加入量は、再生産関係から近年の平均を下回る水準と推定されている。

2020年級群（0歳魚）は、定置網などの各地漁業で漁獲がみられているものの、漁況は低調に推移していることから、現時点での加入量の見積もりは不確実であるが、近年の平均を下回る水準と見込まれる。

2. 来遊量、漁期・漁場、魚体

1) マサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述のとおり、0歳魚（2020年級群）は、これまで得られている情報から加入量が近年の平均程度の水準と考えられ、来遊量は前年並。1歳魚（2019年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。2歳魚（2018年級群）は、加入量が卓越して高い水準と考えられ、来遊量は前年を上回る。3歳魚（2017年級群）は、加入量が近年の平均程度の水準と考えられ、来遊量は前年を下回る。4歳魚（2016年級群）は、加入量が近年の平均を上回る水準と考えられ、来遊量は前年を上回る。5歳魚（2015年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年並。6歳魚（2014年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。7歳魚（2013年級群）は、加入量が卓越して高い水準であり、来遊量は前年を上回る。全体の来遊量は前年並となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

1月～6月の漁獲量は、犬吠以北海域のまき網は61.7千トン（前年同期実績57.6千トン）、犬吠以北海域の定置網・底びき網などは16.7千トン（同31.0千トン）、伊豆諸島周辺海域のたもすくい・棒受網は4.3千トン（同3.8千トン）、伊豆半島～駿河湾～熊野灘のまき網・定置網は32.4千トン（同54.0千トン）、紀伊水道外域～北薩の全漁業では37.6千トン（同39.4千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

1月～6月の魚体は、犬吠以北海域のまき網では、26cm～36cmの3歳魚～7歳魚主体に漁獲され、2月、3月には22cm～26cmの2歳魚も漁獲された。三陸海域の定置網・底びき網などでは、22cm～26cmの2歳魚主体に、26cm～36cmの3歳魚～7歳魚も漁獲され、5月、6月には18cm～22cmの1歳魚も漁獲された。産卵場である伊豆諸島周辺海域では主に伊豆諸島北部海域が漁場となり、30cm～36cmの3歳魚～7歳魚主体に漁獲された。駿河湾～北薩のまき網では、伊豆諸島周辺海域とほぼ同様の魚体が漁獲された。

本予測期間は、犬吠以北海域のまき網、定置網等での漁獲が中心となり、まき網では3歳魚～7歳魚主体に、定置網・底びき網では2歳魚主体に3歳魚～7歳魚も漁獲される。魚群の南下は昨年、一昨年と同様に遅れる可能性があり、まき網漁場は8月～10月は道東海域～三陸北部に、11月～12月は三陸北部～犬吠海域に形成される。各地の定置網では期を通じて断続的に漁獲される。伊豆諸島周辺海域以西への来遊量は低水準ではあるが、熊野灘、豊後水道南部、日向灘では0歳魚、1歳魚主体に、紀伊水道外域では2歳魚～5歳魚主体に、一時的にまとまった漁獲がみられる。

漁獲の主体となる犬吠以北海域の年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。1歳魚：19cm～24cm前後、2歳魚：22cm～27cm前後、3歳魚：26cm～32cm前後、4歳魚：29cm～34cm前後、5歳魚：30cm～34cm前後、6歳魚：32cm～35cm前後、7歳以上：32cm以上。0歳魚は例年の傾向から15cm～25cmと予測される。（各年齢の体長の範囲は広く重なり合っている）

2) ゴマサバ

(1) 来遊量

資源状態の項に前述のとおり、0歳魚（2020年級群）は、直近までの漁況を考慮すると来遊量は低調であった前年並と考えられる。1歳魚（2019年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準と推定されるが、来遊量は少なかった前年を上回る。2歳魚（2018年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であるが、来遊量は少なかった前年を上回る。3歳魚（2017年級群）は、加入量が近年の平均を下回る水準であり、来遊量は前年を下回る。4歳（2016年級群）以上は残存資源量が少なくなって

おり、漁獲の主体とならない。ゴマサバの来遊量は、犬吠以北海域では混獲される程度にとどまり、伊豆諸島周辺海域、熊野灘では極めて低調であった前年を上回るものの低水準となり、その他の海域では前年並～下回り、全体としては低調であった前年並～下回る低水準の来遊量となる。

(2) 漁期・漁場、魚体

1月～6月の漁獲量（全漁業）は、北薩～紀伊水道外域は6.0千トン（前年同期実績11.5千トン）、熊野灘～伊豆諸島周辺海域は3.6千トン（同6.5千トン）、犬吠以北海域は1.9千トン（同0.8千トン）であった。（漁獲量は各地主要港水揚げ資料および水揚げ物標本測定結果等からの推定値）

1月～6月の漁獲の主体は、北薩～薩南海域では3歳魚～6歳魚、日向灘～紀伊水道外域では2歳魚～4歳魚、熊野灘では1歳魚～5歳魚、伊豆諸島周辺海域では2歳魚、3歳魚、犬吠～三陸海域では2歳魚～4歳魚であった。

本予測期間における各地の漁期・漁場と魚体は、北薩～薩南海域では0歳魚～2歳魚主体、日向灘～豊後水道南部では0歳魚、1歳魚主体、土佐湾では3歳魚～5歳魚主体、紀伊水道外域では1歳魚～4歳魚主体、熊野灘では1歳魚～3歳魚主体に0歳魚、4歳以上も混じり、それぞれ期を通じて漁場が形成される。伊豆諸島周辺海域では、伊豆諸島北部海域を中心に2歳魚、3歳魚主体に1歳魚、4歳以上も混じり期を通じて漁場が形成されるが、黒潮流路によっては三宅島周辺海域、銭洲海域にも漁場が形成される。犬吠以北海域のまき網では混獲される程度にとどまり、定置網では一時的にまとまった漁獲がみられる。

年齢別尾叉長は、これまでの体長組成の推移、年齢査定の結果から概ね次のとおりである。0歳魚：20 cm～25 cm 前後、1歳魚：25 cm～32 cm 前後、2歳魚：27 cm～34 cm 前後、3歳魚：29 cm～37 cm 前後、4歳以上：32 cm 以上。（各年齢の体長の範囲は広く重なり合っている）

参 画 機 関

地方独立行政法人 北海道立総合研究機構 水産研究本部 釧路水産試験場 函館水産試験場	和歌山県水産試験場
地方独立行政法人 青森県産業技術センター 水産総合研究所	徳島県立農林水産総合技術支援センター 水産研究課
岩手県水産技術センター	高知県水産試験場
宮城県水産技術総合センター	愛媛県農林水産研究所 水産研究センター
福島県水産海洋研究センター	大分県農林水産研究指導センター 水産研究部
茨城県水産試験場	宮崎県水産試験場
千葉県水産総合研究センター	鹿児島県水産技術開発センター
東京都島しょ農林水産総合センター	地方独立行政法人 大阪府立環境農林水産総合研究所 水産研究部 水産技術センター
神奈川県水産技術センター	香川県水産試験場
静岡県水産・海洋技術研究所	一般社団法人 漁業情報サービスセンター
愛知県水産試験場 漁業生産研究所	(取りまとめ機関) 国立研究開発法人 水産研究・教育機構 水産資源研究所
三重県水産研究所	